



# 2021

# 国語

## 注 意

1. 試験時間は、8:50～9:40の**50分**です。
2. 問題は ㊦ から ㊧ まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学生になったばかりの千鶴は、これまでクラスの中で目立たない自分のことをつまらない人間だと感じていた。新しい自分になるには中学生になった今しかないと思ひ友人のしほりんと野球部のマネージャーを志望するが、自分よりずっと輝いている女子マネージャーの先輩を見たことで気持ちが沈んでいた。

「かっこいい先輩を見つけたから」と、B組の彩葉はバスケ部を選んだ。

「うちのママ、ママさんバレーで全国大会まで行ってるんだ」と、①レイミーは遺伝子に賭けてバレー部へ仮入部した。

②千鶴は次第にあせてきた。いっそ自分もバスケ部かバレー部に、とも思っただけれど、A友達の真似ではいかにも情けない。それに、彩葉もレイミーもすでに部活のみんなと結束をかためているようで、そこにはもう自分の入るI余地などなさそうな気がする。

陸上部は練習がきびしそう。水泳部は水着がはずかしい。考えるほどに、千鶴は自分にぴたっとくる部活なんてどこにもない気がしてきた。運動自体、もともとあまり得意ではないのだ。

それでも千鶴が体育系の部活にこだわったのは、「変わりたい」の一心からだ。ここで文化系の部活を選んでしまったら、この先もずっと、自分はこれまでとおなじレールの上を走りつづけることになる。

新しいわたし。今までとはちがうわたし。部活は、そんな自分に生まれ変わる最大のチャンスなのだ。

そう思いながらも、③足を踏み出す方向が定まらずにいたある日の放課後、吹奏楽部の見学につきあつてほしいと、千鶴はしほりに頼まれた。

「ひとりじゃ行きづらくて。お願い」

「もちろん」

北見二中の音楽室は、本校舎から離れた別棟の北校舎にある。渡り廊下の窓越しに中庭を見おろしながら足を運ぶと、本校舎の喧噪や床の震動が次第に遠のいて、しんとした静けさに包まれていく。

音楽室の戸を開けた瞬間、その静寂を揺さぶる音がした。B 足もとから這いあがってくる低音。それがクラリネットの音色であることに、千鶴は室内を見まわしてから気がついた。

クラリネットだけじゃない。机を前方に積みあげてスペースを空けた室内には、想像以上に多くの部員がいた。トランペット。フルート。打楽器。それぞれのパートごとに練習している。C 教室のあちこちから響く多彩な音。その音と音とが絡みあい、もつれあい、不協和ながらも重層的な音のかたまりを生んでいる。

「見学？」

教室の隅で新入部員の指導をしていた顧問の先生が、千鶴としほりに気がついた。

ベートーヴェンみたいな髪かみの男の先生。でも、顔はあそこまでやばくない。

「あ、はい」

「よろしくお願いします」

あわてて頭をさげたふたりに、「入っておいで」と手招きする。ふたりが足を踏みいれるなり、先生はぱんと両手を打って部員たちに呼びかけた。

「一年生が来たから、ちよつと聴かしてやって」

たちまち、パートごとの小さなかたまりがほぐれ、教室の中心に全員が集合した。先生の指揮棒にたぐられて、その大きなかたまりから蒸気のように④メロディが立ちのぼる。最初はふんわりと。ひとつ、またひとつと音が増え、メロディが膨らむ。膨らむ。膨らむ。ひとりひとりの奏でる楽器が、重なることでその音色を深め、引きたて、美しいハーモニーを育てていく。

砂浜すなはまの波が引いたあとで足もとの砂がすつと動くみたいに、D 千鶴の心は音のほうへと引きよせられた。曲が終わったときにはすっかり感動していた。

なんの曲かもわからない。上手な感想だつてひと言も言えなかったけれど、ベートーヴェン先生は「またおいで」と笑ってくれた。

「なんか、すごかったよね」

「うん。すごいよね、吹奏楽部。つていうか、中学生つてすごい！」

「ほんと、レベル高かった。小学校の鼓笛隊(注3) くてきたいなんて II 目めじゃないね」

「目じゃない、目じゃない」

「うちらも練習したらあんなふうになれるのかな」

帰り道、野球部のときは打ってかわって、<sup>⑤</sup>ふたりのテンションは高かった。千鶴の感動がしほりに、しほりんの興奮が千鶴に乗りうつり、ふたりして無制限に高まっていくみたいに。

「決めた。あたし、吹奏楽部に入る。千鶴も一緒にやろうよ」

しほりに誘われるまでもなく、千鶴の気持ちも吹奏楽部へ傾いていた。

放課後の音楽室にいる自分を、千鶴はたやすく想像できた。すぐに上達するほど器用じゃなくても、まじめに練習を積んで、着実に成長していく自分。仲間や先輩たちともそれなりにうまくやっていく。ありありとイメージできる。できすぎる。

「あのね、わたし……中学生になったら、変わりたいって思ってたんだ」

千鶴は初めてしほりに打ちあけた。

「今までとはちがう自分になりたくて。吹奏楽部は、すごくいいと思うし、すごくやってみたい。でも、それじゃ、今までのわたしと一緒に気もして……」

うまく言えない。<sup>⑥</sup>じれったく黙りこむ千鶴の横顔を、しほりんがじっと見つめている。千鶴が本気するとき、しほりんはいつもおなじくらしいの本気で何かを返そうとしてくれる。ちょうどいい言葉が見つからなくても、見つけだすまであきらめない。

けれど、この日は早かった。

「うん」

胸もとのスカーフをのぞきこむように、しほりんはこっくりうなずいて言ったのだ。

「わかるよ。千鶴の気持ち」

「え」

「あたしも、そんなふうと思うことあるし」

「しほりんも？」

「うん。でも、それでもあたし、千鶴は千鶴らしいことをしたほうがいいと思う」

「そうかな」

「わざと自分らしくないことをするより、千鶴は千鶴らしいことをして、今までの千鶴以上にそれをがんばって、その先に、今までとちがう千鶴がいるんじゃないのかな」

千鶴は千鶴らしいことをして、今まで以上にそれをがんばって、その先に、<sup>⑦</sup>今までとちがう千鶴がいる――。

千鶴はその言葉を吸いこんだ。とたん、<sup>⑧</sup>道のむこうに広がる夕焼け空が朝焼けみたいに光り方を変えた。

「うん。そうかも。そうならいいな」  
すうっと肩かたから力がぬけた。

「ありがとう、しほりん。わたし、決めた。明日、仮入部届けもって、ヴェンに会いに行くよ」

「あたしもヴェンに会いに行く」

「わたしのヴェンに？」

「あたしのヴェンだよ」

顔を見合わせたふたりの笑いがはじける。勢いあまって千鶴が駆けだすと、しほりんが「待てーっ」と追ってきた。

E だいぶ足になじんできた通学路に響く、<sup>⑨</sup>スタツカートの足音。

ふたりのスカートをなびかす風は、いつしか五月の山吹色やまぶきに香っていた。

<sup>⑨</sup>鈍行列車どんこうでもかまわない。

わたしはわたしの速度で行こう。

その先にはきつと新しい、見たことのない景色が広がっているはず。

(森絵都もりえと『クラスメイツ 〈前期〉』所収「鈍行列車はゆく 千鶴」による)

(注1) 体育系の部活…運動をする部活動。

(注2) 文化系の部活…運動を伴わない活動をする部活動。

(注3) 鼓笛隊…笛と太鼓たいことからなる行進用の音楽隊。

(注4) スタッカート…楽譜がくふに書かれる、一音符おんぶずつ短く切って演奏することを示す記号。

問一 波線部Ⅰ・Ⅱの言葉の意味として適当なものを次の中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

Ⅰ 余地

ア ようす  
イ ゆとり  
ウ 能力  
エ わけ  
オ 選択

Ⅱ 目じやない

ア 頼りにならない  
イ 見るにたえない  
ウ 興味が湧かない  
エ 見る目がない  
オ 相手にならない

問二 傍線部①「レイミーは遺伝子に賭けてバレー部へ仮入部した」とありますが、どういふことですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 母親と同じ競技を自分もやらなければならないという使命感を感じ仮入部したということ。  
イ 母親と同じバレーを頑張ることで親子の仲が一層深まることを期待し仮入部したということ。  
ウ 母親のバレーでの成績を娘の自分が超えたいという対抗意識を抱き仮入部したということ。  
エ 母親がバレーで活躍しているため自分にもバレーの才能があると信じ仮入部したということ。  
オ 母親と自分は親子でよく似ているため無意識で同じバレーを選んで仮入部したということ。

問三 傍線部② 「千鶴は次第にあせってきた」とありますが、それはなぜですか。六十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③ 「足を踏みだす方向」とありますが、この表現と反対の意味の表現にあたるものを文中より六字で抜き出しなさい。

問五 傍線部④ 「メロデイが立ちのぼる」とありますが、ここで使われている表現技法と同じ表現技法が使われているものを傍線部A～Eの中から二つ選んで、記号で答えなさい。

- A 友達の真似ではいかにも情けない
- B 足もとから這いあがってくる低音
- C 教室のあちこちから響く多彩な音
- D 千鶴の心は音のほうへと引きよせられた
- E だいぶ足になじんできた通学路に響く、スタツカート足音

問六 傍線部⑤ 「ふたりのテンションは高かった」とありますが、その理由として適当でないものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- A 吹奏楽部の部員として活動する自分を思い期待が膨らんだから。
- I 吹奏楽部なら自分たちでもすぐ先輩に追いつける自信があったから。
- ウ 吹奏楽部の素晴らしい演奏を目の当たりにして胸を打たれたから。
- エ 自分がやりたいと思う部活を見つけてうれしかったから。
- オ 中学生の演奏レベルが高く小学生との違いに衝撃を受けたから。

問七 傍線部⑥「じれったく黙りこむ千鶴」とありますが、その気持ちとしてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 変わりたくて入部をためらっていることを知ってほしいがうまく伝えられずもどかしい気持ち。
- イ 自分の都合で誘いを断るのが気まずくてどう伝えたら良いのか分からず困惑する気持ち。
- ウ 変わりたいと思っていたことを知られる恥ずかしさから言葉につまる自分にいら立つ気持ち。
- エ 自分が意を決して打ち明けたにもかかわらず理解してくれないしほりんを不満に思う気持ち。
- オ 隠し事をしていた後ろめたさからいつも通りに話せなくなった自分を情けなく思う気持ち。

問八 傍線部⑦「今までとちがう千鶴」とありますが、どのような千鶴が想定されますか。二十字以内で答えなさい。

問九 傍線部⑧「道のむこうに広がる夕焼け空が朝焼けみたいに光り方を変えた」とありますが、これは千鶴がどのような気持ちになったことを表現していますか。もっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 劣等感が優越感に変わり誇らしい気持ちになったということ。
- イ しほりんを改めて見直して尊敬する気持ちになったということ。
- ウ 抱えていた悩みが消えて晴れやかな気持ちになったということ。
- エ これまでの考えを悔い改め反省する気持ちになったということ。
- オ 戸惑っていた気持ち落ち着き冷静な気持ちになったということ。

問十 傍線部⑨「鈍行列車でもかまわない」とありますが、ここには千鶴のどのような気持ちが表れていますか。六十字以内で説明しなさい。



二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私自身にまつわるひとつの思い出話からはじめよう。

小学校に上がって間もないころであった。私は通学途中<sup>とちゆう</sup>で、できたばかりの二人の友だちに、宇宙へ出てしまえば私たちが普通<sup>ふつう</sup>考えているような「上」とか「下」とかは意味がなくなってしまうのだということを説明しようとした。などというとき、A 早熟<sup>せいじゅく</sup>で想像力豊かな子どもだったように聞こえるかも知れないが、B、親から知識としてそのように聞かされていたことをただ受け売りしただけである。

(中略)

ところが悪いことに、友だちは、私のいおうとすることをまともに聞こうとしなかった。変なことをいうやつだと思ったにちがいない。私はつたないことばで「うちゅうへいってしまえばどっちが上でどっちが下かなんていうことはなくなるんだ」と何度も繰り返していったのだが、やがてかれらはそんな頑固<sup>がんこ</sup>な私にうんざりしたのか、① 私のことをからかいはじめた。空と地面を代わる代わる指さしながら、大きな声で「上があって下があるじゃないか！ ハッハッハ！ 上があって下があるじゃないか！」とはやしたてたのである。私はくやしきのあまりものも言えなくなってしまった。

② 私<sup>き</sup>は、なぜこの経験<sup>きんけん</sup>を深く記憶にとどめているのだろうか。もちろん、真実を伝えようとまじめな努力をしたのに、それが通用しなくて逆にかかわれてしまったくやしさを忘れることができないというのが、第一の理由であろう。だが、それだけではないという感じがどうしても残るのである。

そもそもどうして私は、当時のこの年齢<sup>ねんれい</sup>にはふさわしいと思えない「宇宙」についての話題などを、それも、C 理屈<sup>りくつ</sup>っぽいしかたで友だちに提供しようとしたのだろうか。おそらく、大げさというなら、「宇宙へ出れば上も下もない」というこの「問題」が、七歳<sup>さい</sup>という年齢における私の心にとって、何か重要な意味をもつ「大問題」としてとらえられていたのだ。つまり、親から知識としてあたえられたその事実が、③ 私自身の日常感覚を激しくぐらかせるものであったのだ。それは、何か見知らぬ不気味なものにふれてきた子どもが、半信半疑のままその模様を人に伝えようとするのに似ている。

私は友だちとの対決の場面では、A、真理をあくまで主張する筋金入りの子どものようにふるまっている。親の断定は、自分が依存<sup>いぞん</sup>し信頼<sup>しんらい</sup>している人の断定であるがゆえにひとつの絶対的な信仰<sup>しんこう</sup>のように私のなかに植えつけられた。そしてそれを私はまるで、無神論者<sup>むしんろん</sup>に向かって「神は存在する」と躍起<sup>やつき</sup>になって主張するかのよう<sup>よう</sup>に友だちに伝えようとしたのだ。

ところが、このときの自分の気持ちにできるかぎり忠実に立ち返ってみると、これもまた神を説いてまわる「信仰者」のすべてが、自分の信念に一点の疑念も抱いていないとは必ずしもいえないように、B 私は、自分で主張していることそのものについて十分に得心できていたわけではなかったのである。あたえられた「知識」と自分なりの「納得」との間には大きな裂け目が開いていた。友だちに向かってX を尖らせて説得を試みながら、本当は私は、「上も下もない」とはいつたいどういうことなのだろうと④ひそかに悩んでいたのだと思う。

だから私がこの体験をありありと記憶している理由は、ただわかっただけでなく、自分で十分納得できていないことを強弁すればするほど、その納得できなさが自分に向かって突きつけられることになったからなのである。私はいわば、存在の不安定さのなかにますます落ち込むことになったのだ。

さて、これは私という一個の、もしかすると少しばかり特異な資質に還元されてしまえばそれきりという問題にすぎないのだろうか。いうまでもなく、私はそうとはいいきれないといたいのである。(中略) 私が一見こんなどうでもいいように思えることをC とりあげるのは、要するに成長発達における「文学」的な主題を、「論理」的な普遍性のレベルに結びつけたいからなのである。

「上も下もない」とはいつたいどういうことかとおそらく私は悩んでいた。⑤このことは、この年齢くらいの子どもにとってある普遍的な意味を提供してはいないだろうか？

六、七歳といえ、幼児期から児童期への移行期にあたっている。その移行期にこのような認識をあたえられて動揺したという事実は、なかなか象徴的である。「上も下もない」ということは、幼児にとってたいへん呑み込みにくい、座りの悪い認識である。それまで自分のなじんできた身体感覚から意識をもぎ離して、重力のはたらかない空間に自分の体をおいてみるという架空の設定を必要とする。そして六、七歳という移行期の年齢では、まだそういうたぐいの想像力は、かなり精神的に背伸びをしないと得られないものではないかと思われる。というよりも、そういう認識の図式を押しつけられたとき、かれらは、⑥了解を越えた存在不安のようなものにかられるのではないだろうか。私は友だちに対して、この認識を得意げに強調しているのだが、本当のところは、大人からの知識を受け売りしてやることによって、自分の感じているなじみにくさを相手にも共有してもらい、自分の不安を解消しなかったのではないかと思われる。

考えてみれば、幼児にとって上下の感覚を否定されるということは、頭のなかに革命的な混乱を引き起こしかねない事態であるといっても過言ではない。幼児は、先立つ数年間の間に、自分の足でこの大地に立つことをおぼえ、重力が支配する場に基づく身体感覚を養っている。また、自分よりもはるかに体の大きい「大人」という存在との接触を通じて、上下、高低の感覚を身につけてきている。

転んでしまうと、きちんと立ち上がるのに相当の努力を要すること、「たかいたかい」や「だっこ」をされること、親と一緒に歩くために、自分の手を高くもちあげて親と手を繋ぐこと、大人と何かコミュニケーションをするために、いつも Y をあげて、とても高いところにある大人の目と視線を交わすこと、これらの経験は、上下という空間的概念の絶対性が、自分の身をしっかりと安定したものとして感じるためにいかに大きな意味をもっているかを体験的に教えるだろう。

ところが、「上」とか「下」とかが意味をなさない世界があると教えられることは、そのたいせつな条件を否定されることだ。彼は、急いで自分のこれまでの世界像を修正し、再編しなくてはならない課題に直面することになる。だから少なくとも私にとって、あの教えは、新しい知の体系への入門の意味をもっていたのだ。

(小浜逸郎『大人への条件』による)

(注1) 早熟：精神や肉体の成長がほかの者より早いこと。

(注2) 無神論者：神の存在や意思を認めない考えの人。

(注3) 普遍(性)：多くのことに共通して当てはまること。

問一 空欄A～Cに入る適語を次の中から選んで、記号で答えなさい。(同じ記号には同じ語が入ります。)

ア ことさら      イ かえって      ウ 実は      エ およそ      オ いかにも

問二 傍線部①「私のことをからかいはじめた」とありますが、その「からかい」はどのようなものですか。もっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 小学生のくせに生意気なことを知ったかぶって説明するので、たたきのめしてやろうとするもの。

イ 親からの受け売りで大した説明もできていないので、えらそうな態度を改めさせようとするもの。

ウ 私の主張に反する事実をはっきりと示して、私がいかに変なことを述べているかあざけるもの。

エ 友だちに新しい知識を提供するなら、けんか口調で話すのはよくないと反省させようとするもの。

オ 同じ内容ばかりを繰り返す私にうんざりして、わざと話題を曲げてやめさせようとするもの。

問三 傍線部②「私は、なぜこの経験を深く記憶にとどめているのだろうか」とありますが、その理由を二つ、それぞれ三十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③「私自身の日常感覚」とありますが、それは一般的に「幼児」にとつてはどのようなようにして養われるものですか。「上下」という語句を用いて具体的に五十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部④「ひそかに悩んでいた」とありますが、なぜですか。具体的に五十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部⑤「このことは、この年齢 〽 いないだろうか」とありますが、このような悩みはこの年齢の子どもにとつて、どのような「普遍的な意味」をもちますか。本文中より十五字以内で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑥「了解を越えた存在不安」とありますが、どういうことですか。もつとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア いままで身体と論理をバランスよく用いて適切に対応してきたが、これからどうしてよいか方針が見つからない状態。

イ いままで身体や感覚を根拠に納得してきたことがあてにならず、かといってこれからどうするかも分からない状態。

ウ これまで身体を根拠に納得してきたことがあてにならず、これからは周囲の状況をよく観察して判断するしかない状態。

エ これまで親のあたえる情報を信用しすぎたため、これからは個人の持つ想像力を大切にしていこうとする状態。

オ これまであまりに身体や感覚にばかり依存してきたので、これからは社会の情報を有効に活用していこうとする状態。

問八 空欄X・Yに入る、身体の一部を表す漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問九 本文の説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分が個人的な思い出に振り回されてしまう理由を疑問視し、最後は自分の性格的問題点をえぐり出している。
- イ 当時は宇宙は子どもの話題には不適切な時代だったということ、悔しさと懐かしさを交えて回想している。
- ウ 思い出を大人になってから見つめなおすと、子ども時代には通り過ぎた真実を発掘する幸運に恵まれると述べている。
- エ 子どもが成長する過程には大きな誤解や戸惑いなどが立ちふさがり、大人になることの困難さを訴えている。
- オ 自分の個人的体験にすぎなかった思い出を成長という観点から検討し、大きな意味を探り出す展開となっている。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① お店のカンバンが目立っている。
- ② ユウビン局から手紙を送る。
- ③ 試験はカンタンな問題ばかりだ。
- ④ 自然豊かなゾウキバヤシを散歩する。
- ⑤ 相手チームの勢いに押されてシリゾク。



三

二

一

②×5	④	②×2	④	④	⑤	⑥	③	⑤	④	②×3	⑦	④	⑤	④	④	②×2	④	⑥	③	②×2															
①	問九	問八	問七	問六	問五			問四			問三		問二	問一	問十				問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三			問二	問一						
看板	オ	X	イ	新	た	も	ら	自	に	覚	大	自	二点目		一点目		ウ	A	な	に	凡	無	ウ	る	自	ア	イ	B	お	が	活	る	周	エ	I
		口		し	か	で	教	分	よ	を	人	分	い	自	て	真		オ	ろ	頑	で	理		千	分		E	な	見	に	の	周		II	
郵便		Y		い	ら	き	え	が	っ	身	と	の	な	分	か	実		ウ	う	張	も	に	鶴	に	自			じ	つ	こ	に	の		オ	
		首		知	。	な	ら	絶	て	体	の	身	か	で	ら	を		B	と	っ	自	変		。	自			レ	け	だ	、	友			
③				の		い	れ	対	。	に	触	体	っ	も	か	伝		C	い	て	分	わ		信			ー	ら	わ	千	達				
				体		が	た	的		取	れ	で	た	真	わ	え		ウ	う	成	の	ろ		を			ル	れ	っ	鶴	は				
④				系		、	真	な		り	合	世	か	実	れ	た		C	決	長	ペ	う		も				て	て	は	入				
				へ		納	実	信		込	い	界	ら	が	悔	か		ア	意	し	ー	と		っ				い	い	苦	る				
⑤				の		得	な	頼		ん	の	を	。	う	し	っ			の	た	ス	せ		て			い	た	手	部					
				入		も	の	を		だ	中	感		ま	か	た			気	新	で	ず		学			い	な	な	活					
④				門		で	で	寄		り	で	じ		く	っ	の			持	し	今	、		校			か	め	体	を					
				の		き	疑	せ		す	上	取		納	た	に			ち	い	ま	た		生			ら	合	育	決					
⑤				意		な	う	る		る	下	っ		得	か	、			。	自	で	と		活			。	う	系	め					
				味		か	こ	親		こ	の	た		で	ら	か				分	以	え		を				部	の	て					
⑤						っ	と	か		と	感	り		き	。	え				に	上	平		送				活	部	い					
														て		っ																			

国語

解答用紙

注意  
 一字数制限の問題では、句読点も  
 一字として数えます。

受験番号	フリガナ	
	氏名	

得点	
----	--